

### 3. 調整・使用痕陶器片について

調整・使用痕陶器片については、別に論じたことがある（川添 2009）。本報告では、調整のみの陶器片と、調整と敲打・磨滅などの使用痕が認められる資料とを別に報告した。前者には、古瀬戸類卸皿・山茶碗類碗・入子があり、後者には古瀬戸類卸皿・同片口鉢・山茶碗類碗・同小皿・入子がある。これらの資料は、窯業遺跡における生産の様相を復元するための糸口になるばかりか、窯跡で出土する遺物の遍歴について考えるのに重要なである。

今回、調整と敲打・磨滅などの使用痕が認められる資料については、山茶碗類の事例を多く抽出することができた。多くは、敲打状の使用痕が認められるもので、程度が集中して使用面端部にツブレがあるものがほとんどである。使用状況の想定としては、第一に焼成後の製品の器面調整を挙げることができよう。長石などの吹き出しなどの除去を窯出しの段階で行なった、という想定である。今回、可能性のある資料ということで 100 点近い資料を提示した。多量に生産された山茶碗に対しては当然の数量なのかもしれない。

## 第2節 山茶碗雑考

### 1. はじめに

東海地域には、中世前半期（11世紀から15世紀にかけて）に、山茶碗と呼ばれる無釉の陶器が出現・盛行する。筆者は、この遺物の分析・解明こそが、東海地域の中世期研究の鍵になるとを考えている。今回は、その概要について述べていく。

### 2. 山茶碗の概要

畿内陶邑で初期須恵器が製作され始めた頃と同じ時期に、東山丘陵地域において猿投窯で初期須恵器が製作され始め、その後、平安時代には灰釉陶器とよばれる施釉陶器の生産が開始される。さらに平安時代末頃から、無釉の碗・小皿と四耳壺などの壺瓶類の生産が始まる。この無釉陶器類が山茶碗と呼ばれるものであり、特に碗は灰釉陶器からの型式変化が追えるものである。瀬戸窯では、四耳壺などの壺瓶類には釉を施すなど、製作・焼成状況に大きな違いが認められるようになる。このような施釉陶器群は、同様に製作された他器種

をも含めて古瀬戸といわれている。このように山茶碗・古瀬戸の両者が明瞭に区分される状況は、東海地域の中世古窯の中でも、瀬戸窯の特徴であるといえる。

山茶碗という名称は、窯跡などの山に行くと多く散在していることから付けられた名称であるといわれている。かつては、行基が伝えたという伝説から、行基焼きともいわれていた時もあった。山茶碗という名称は、下に示すようにこの種の無釉陶器群全体を示す名称であるため、名称としては不適切であるということから、灰釉系陶器という名称が一時期提唱された時もあった。しかし現在ではやはり山茶碗という名称で落ち着いているようである。

山茶碗は、遠江・三河・尾張・伊勢地域に濃密に分布する状況が知られている。生産地としては、恵那および中津川・東濃・瀬戸・猿投・知多・渥美・湖西などを中心に、10程度の古窯址群が知られている。これらの地域では、共通して、碗・小皿

が構成の主体をなす。瀬戸窯では時期が下るに従って入子・陶丸が構成要素に加わる。入子は当初は古瀬戸の一群で製作されていたものである。各古窯址群によって、器形・胎土・質感に相違があり、特に大きな差としては、均質な胎土を用いる東濃と、長石・チャートなどの混和剤が目立ち粗雑な作りの瀬戸とがよく知られている。

最近の研究は、中世瀬戸窯を中心に分析した藤澤良祐の研究に負う所が大きい。藤澤は、瀬戸窯の山茶碗について、第3型式から第11型式を設定し、実年代との対比を試みた（藤澤1990）。瀬戸・猿投・常滑は製品の様相も類似しているおり、変遷の方向は概ね一致しているようであり、これらを総称して尾張型山茶碗と称している。藤澤は、東濃と湖西との編年関係、さらには消費遺跡への広がりなど、山茶碗について総合的な論考を行った（同1994）。

以下、資料について言及するが、すべての古窯址群について言及することはできないことから、主に瀬戸と東濃について言及する。

### 3. 製作の様相

瀬戸窯では、山茶碗と古瀬戸とは区別して製作されている。無釉陶器である山茶碗は還元焼成、施釉陶器である古瀬戸は酸化焼成であると言われており、窯壁の色調が前者は灰褐色に、後者は明赤褐色を呈する。しかし、両者ともに窯窓で構造上の差は認められない。

碗と小皿とは底部径がほぼ同一である。碗は輪積み口クロ引きで製作されたようであり、底部には糸切痕が残されており、碗の場合、7型式までは貼付高台が認められる。8型式以降、貼付高台が輪トチン化したといわれており、無高台化していく。

碗は、焼台の上にいくつも重ねて焼成したと考えられる。小皿はそれ専用の焼台の上に重ね焼きしたものも確認できているが、碗内部などの隙間に置いて焼成を行ったようである。

山茶碗については明確なトチンの使用は不明瞭である。上述したように、8型式には貼付高台が輪トチン化したともいわれているが、検討の余地がある。碗には底部に多量の糸殻の圧痕が認められる。貼付高台部分を中心に認められ、東濃系の場合、内面にも糸殻の圧痕が確認できる。この現象は碗のみであり、小皿には見られない。焼成後の色調は、灰色・白色・淡い赤褐色を呈する場合があるが、基本的には灰色・白色の製品を製作しようとした意図が考えられる。また、瀬戸窯の製品は、胎土に含まれる長石が焼成の熱により膨張し、器面に著しく凹凸が生じる場合がしばしば認められる。

### 4. 使用状況

東海地域において、消費遺跡からは多くの山茶碗が出土する。内面には使用によると考えられる磨滅が確認できる。また、瀬戸窯の製品の場合、混和剤の膨張による凹凸を工具によって平滑にしているようであり、これは窯出し後の出荷の段階で行われた可能性が考えられる。

山茶碗では、墨書が認められるものがしばしば確認される。多くは底面に記号状のものである。

### 5. 転用

転用は、生産遺跡である窯跡と、消費遺跡である集落跡では、大きく異なる。

窯跡の場合は、製品として出荷できなかつた、いわば失敗品が転用される場合が多いと考えられる。ひとつは、窯体構造に使用される場合である。

窯壁の補修材に製品・破片が含まれていることがしばしばある。また、分焰棒への使用、一部には分焰柱の構築に使用される場合もある。また、猿投・常滑では、窯床下に山茶碗を伏せた状態で並べ、下部構造を構成している場合がしばしば確認されている。さらに、陶器片をそのまま、あるいは若干加工して、製品製作の調整具などに使用されたものもある（調整・使用痕陶器片）。

消費地遺跡では、碗の底部を中心に、敲打調整によってサイコロ状に加工したものがしばしば出土する（加工円盤）。東海地域の中世前半期にいわれている加工円盤は、山茶碗からの転用品のみである。

## 6. 消費遺跡における出土状況（廃棄・埋納の様相）

山茶碗は、中世前半の遺跡において、普遍的に多く出土する遺物である。包含層中、あるいは遺構内から破片資料で出土する場合が多い。但し、特異な出土状況が認められる事例が複数存在する。

①自然流路の落込みから、完形に近い資料が大量に出土する事例がある（惣作・鐘場遺跡など）。陶器内面・外面には炭化物状のやや煤けた状態のものが多く、一部には墨書きが施されているものもある。

②土坑墓の副葬品として入る場合がある（松戸遺跡など）。土葬墓（单葬）からの出土のみであり、決して火葬墓には関連しない。

③配石・集石を伴う周囲から多量に出土する場合もある（御山寺遺跡）。御山寺遺跡では、配石・

集石は自然流路へ落ち込む際に繰り返し形成されており、落ち込み下では連続した土坑群が形成され、その内の1土坑からは多量のモモ種子とウマの歯が出土した。

④上述した加工円盤は、区画溝の埋土内に集中して出土する傾向がある。

## 7. 総括と今後の課題

山茶碗は、現代人の感覚からでは、粗雑で、変化に乏しい陶器であり、どこの中世遺跡でも出土する遺物であることから、これまで一部には単なる日常什器の一つとして考えられてきた経緯がある。しかし、上述したように、分布の様相・製作・使用・出土状況を勘案すると、単なる日常什器であったと考えられない状況が推察できよう。私見としては、古瀬戸は仏教系の遺物、山茶碗はより土着宗教的な（例えば神道系など）性格を有する遺物ではなかったのではないかと考えている。今後、より解明しなくてはならない問題が二つある。一つは製作におけるイネ穀殻の位置づけである。トチン代わりに製品間に挟み込むことで、焼成後離れやすいことは理解できるが、単に機能的な側面のみならず、当時のコメ生産の状況・および圧痕付着の製品としての効果についての検討も必要である。もうひとつは消費遺跡における出土状況の検討である。特に①の状況が時間的・地理的に範囲を絞ることができれば、共通した信条の集団範囲を考える一根拠になると考えられるからである。

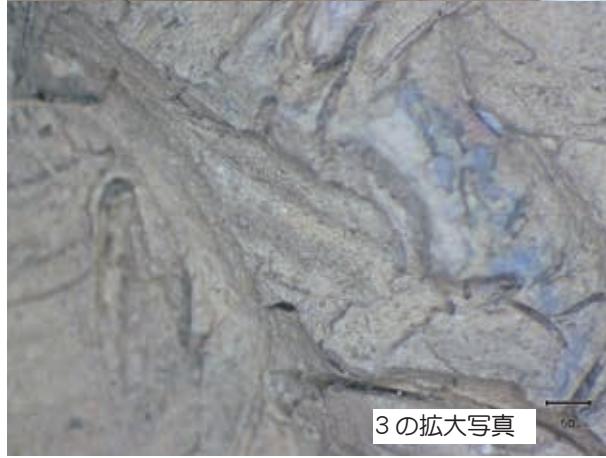
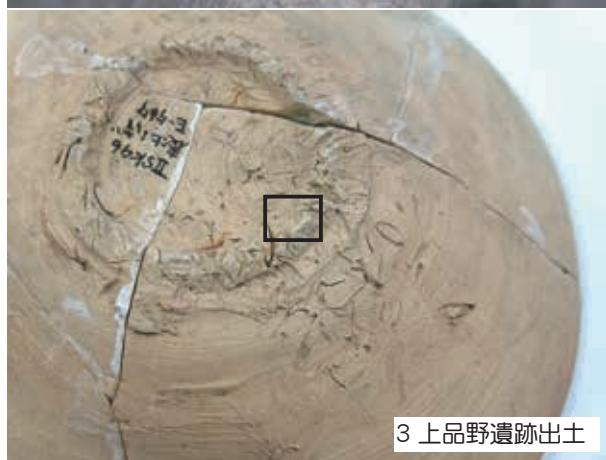
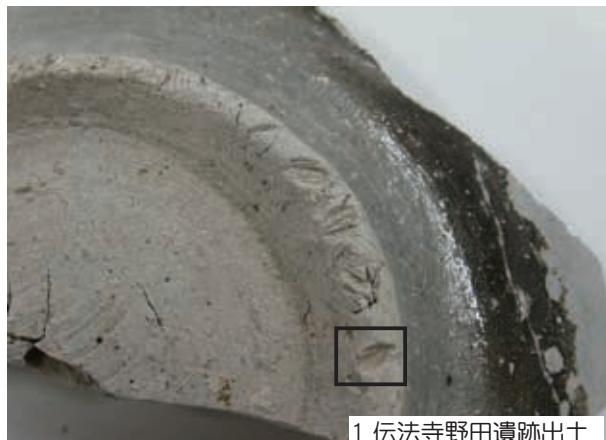


写真 10 山茶碗類底部粉圧痕写真

## 参考文献

- 河合君近 2008 「中世瀬戸窯の遺跡構造」『瀬戸窯』 329～340 頁。財団法人瀬戸市文化振興財団。
- 川添和暁 2009 「窯業遺跡から出土する調整・使用痕のある陶器片について－東海地域の事例提示と中世山茶碗に関する一検討－」『日本考古学』 28.55～68 頁。日本考古学協会。
- 川添和暁 2011 「縄文時代後期注口土器の残存状況に基づく分析－豊田市今朝平遺跡出土資料より－」『研究紀要』 12.1～8 頁。愛知県埋蔵文化財センター。
- 武部真木 2006 「山茶碗の用途をめぐって－摩滅痕の分析から」『研究紀要』 7.99～108 頁。愛知県埋蔵文化財センター。
- 藤澤良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』 3.111～134 頁。瀬戸市教育委員会。
- 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』 高志書院。

## 報告書など

- 青木 修編 1997 『太子A窯跡』 財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター。
- 青木 修編 2005 『吉野遺跡』 財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター。
- 岡本直久・佐野 元・河合君近, 2002 『内田町遺跡』 財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター。
- 河合君近ほか 2009 『紺屋田 A 窯跡』 財団法人 瀬戸市文化振興財団。
- 川添和暁編 2004 『宇トゲ窯跡・中洞窯跡』 愛知県埋蔵文化財センター。
- 川添和暁編 2009 『大坪西遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター。
- 酒井俊彦編 2008 『惣作・鐘場遺跡 II』 愛知県埋蔵文化財センター。
- 瀬戸市史編纂委員会 1986 『瀬戸市史 資料編二 自然』 瀬戸市。
- 瀬戸市教育委員会文化財課 1997 年 『瀬戸市内遺跡詳細分布調査報告書』 瀬戸市教育委員会。
- 服部 郁ほか 1992 「吉田・吉田奥遺跡」『上之山－愛知県瀬戸市吉田・吉田奥遺跡群 広久手古窯跡群 発掘調査報告書－』
- 永井宏幸編 2004a 『長谷口遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター。
- 永井宏幸編 2004b 『吉野遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター。
- 永井宏幸ほか 2005 『鳳山 C 窯跡 惣作・鐘場遺跡 I』 愛知県埋蔵文化財センター。
- 橋崎彰一・藤澤良祐ほか 2007 『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』 愛知県。
- 藤澤良祐 1990 「山茶碗と中世集落」『尾呂』 瀬戸市教育委員会。
- 宮石宗弘ほか 1958 『大坪遺跡』 山口遺跡調査保存会。
- 宮石宗弘ほか 1963 『大六遺跡』 瀬戸市教育委員会。